思春期青年期精神科デイケアの発達の場についての考察

福祉心理学専攻　鈴木　扶希

要　旨

昨今の日本の精神保健の分野では、10 代 20 代の自殺者数の増加や不登校児童生徒数の増加を受け、児童思春期・青年期への支援の必要性が高まっている。そこで注目されているのが、利用者が安心して参加できる、二次的な精神疾患への適切な配慮を受けながら自信を回復させていくことができる思春期青年期の年齢に特化した精神科デイケアである。

思春期青年期精神科デイケアは治療の場であるとともに発達の場である。思春期青年期精神科デイケアにおいては、利用者が安心して発達課題に取り組める環境や、利用者が居場所を得て他者と関わりながら発達の歩み直しをすること、社会生活への対処を学ぶことが重要であると言われている。しかしながら未だその実践は少なく、機能や効果について述べられているものはあるが、実際の利用者の主観的体験を検討したものはわずかである。

したがって本研究の目的は、実際に思春期青年期デイケアを利用した OB の語りをもとに、デイケアの場がメンバーにとって発達の場になっているのかを確かめ、思春期青年期デイケアでどのようなことが体験され、何が成長を支えていたかを検討することであった。その上で今後の思春期青年期デイケアで支援を行う時の示唆を得ることを目的とした。

本研究では質的研究を用い、研究協力者 2 名に半構造化面接を行ってデータを収集した。分析は、語りの内容からテーマ・構成概念を導き、理論化までのプロセスを進める SCAT の手法を用いた。

結果より、思春期青年期デイケアでメンバーは居場所を得て新たな社会の場に居場所を見つけるという発達の過程を歩んでおり、デイケアは発達の場であるという従来から言われている見解を確認することができた。また、メンバーはデイケアで、人とつながること、学び・試行錯誤の体験、遊びを体験していた。このような体験を支えていたのが感覚的に体験される安心感、責任が猶予される安心感、ひとへの安心感ということも確認された。

これらのことから思春期青年期デイケアの場は、デイケアの場づくりと、メンバーの体験を支えるスタッフの関わりが重要であるということが示唆された。デイケアの場づくりに関する支援には以下の 4 つのことが考えられた。一つ目は明るく受容的な雰囲気の話ができる場であること、2 つ目は安全感や遊びが保証されている場であること、3 つ目は回復と発達に十分に向かえる時間を保証する場であること、4 つ目はメンバーが失敗も含めて様々な体験ができるような柔らかくしなやかな場を作ることが示唆された。また、スタッフの関わりについては 5 つのことが考えられた。一つ目はメンバーに支持的であること、2 つ目はメンバーとともに考えながら課題を乗り越える支援をすること、3 つ目は個人や場の力動を細やかに把握すること、4 つ目は体験や感情を共有しともに在るということ、5 つ目は回復や発達の過程をメンバー自身とともに見守り回復や発達の自然な動きを支えることが大切であることが示唆された。

しかし本研究においては、発達の移行の場としてのデイケアの機能について、社会に新たな場を獲得したケースとそうでないケースについて、デイケアで過ごした時間に対する

評価が異なることも明らかになり、思春期青年期デイケアが発達の場・成人期への移行の場であるためには、青年期の課題である新たな場の獲得への積極的な支援、例えば他機関と連携しながら移行を支える支援も重要であることが示唆された。

最後に本研究の課題について、結果の一般化の範囲の問題、そして用いた研究手法という２点から考察を行った。